

都市計画道路志免・宇美線街路事業関係文化財調査報告

湯柱遺跡

福岡県文化財調査報告書 第253集

2016

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成 21 年度に、都市計画道路志免・宇美線の街路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。本報告書は、糟屋郡宇美町に所在する湯柱遺跡の調査の記録です。遺跡の所在する宇美町は、三郡山系に囲まれた豊かな自然の中に、数多くの文化財が存在しています。今回の調査地のすぐ北には、神功皇后が応神天皇を産んだ地を祭ったという宇美八幡宮が鎮座しており、「宇美」の地名は「産み」に由来するものとされています。また、宇美町は魏志倭人伝に記される不弥国（不美）の候補地の一つであります。今回の発掘調査で確認された文化財は、ちょうど魏志倭人伝に描かれた時代のものであり、地域の歴史を語る上で興味深い資料が加わったと言えるでしょう。本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 28 年 3 月 31 日

九州歴史資料館長

館長 杉光 誠

例　　言

1. 本書は、都市計画道路志免・宇美線街路事業に伴い、平成 21 年度に発掘調査を実施した福岡県糟屋郡宇美町に所在する湯柱遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、福岡県教育庁総務部文化財保護課が福岡県県土整備部福岡県土整備事務所から執行委任を受けて実施したものである。

なお、平成 23 年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査関係の業務は、組織改編のため九州歴史資料館に移管されたため、報告書の作成は福岡県県土整備部福岡県土整備事務所と協定を交わし九州歴史資料館が実施した。
3. 発掘調査は文化財保護課参事兼課長技術補佐小池史哲、調査第一係長吉村靖徳、同技術主査岸本圭が実施した。
4. 本書に掲載した発掘調査の記録写真は調査担当者が撮影した。空中写真は、(有)空中写真企画と委託契約を交わしバルーンにより撮影した。出土品の写真是九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が撮影した。
5. 発掘調査の記録図面は調査担当者および福岡大学大学院斎藤大輔が作成した。
6. 出土品の整理作業は、九州歴史資料館において岡田諭が担当して実施した。
7. 本書で使用した方位は、世界測地系の座標による。
8. 本書に使用した周辺遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「太宰府」を一部改変したものである。
9. 出土品および発掘調査の記録類は九州歴史資料館において保管する。
10. 本書の執筆は、Ⅲを吉村が行い、その他と編集は岸本が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	発掘調査の経過	2
3	調査の体制	3
II	地理的・歴史的環境	4
III	調査の記録	7
1	遺跡の概要	7
2	検出された遺構	9
3	出土遺物	11
IV	おわりに	28

図版目次

図版 1	1 調査区全景（西から）	2 調査区全景（右下が北、空中写真）
図版 2	1 調査区全景（西から）	2 調査区南半部（北西から）
	3 桶状遺構（東から）	
図版 3	1 淀まり状遺構（西から）	2 谷部南半（北西から）
	3 谷部遺物出土状況（西から）	
図版 4	中央包含層・南包含層出土土器	
図版 5	南包含層・その他層位出土土器	
図版 6	出土石器・木製品	

挿図目次

第1図	字美町の位置	4
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第3図	遺跡周辺地形図 (1/2,500)	7
第4図	遺構配置図 (1/200)	8
第5図	桶状遺構桶底板実測図 (1/6)	9
第6図	土坑・桶状遺構実測図 (1/30)	10
第7図	杭列実測図 (1/40)	11
第8図	中央包含層出土土器実測図1 (1は1/4、他は1/3)	12
第9図	中央包含層出土土器実測図2 (1/3)	13
第10図	中央包含層出土土器実測図3 (1/3)	14
第11図	中央包含層出土土器実測図4 (1/3)	15
第12図	中央包含層出土土器実測図5 (1/3)	16
第13図	南包含層出土土器実測図1 (1/3)	17
第14図	南包含層出土土器実測図2 (22は1/4、他は1/3)	18
第15図	南包含層出土土器実測図3 (1/3)	19
第16図	南包含層出土土器実測図4 (35は1/4、他は1/3)	20
第17図	南包含層出土土器実測図5 (1/3)	21
第18図	砂礫層出土土器・土製品実測図 (1/3)	22
第19図	その他の層位出土土器実測図1 (1/3)	23
第20図	その他の層位出土土器実測図2 (1/3)	24
第21図	石器実測図1 (1～5は2/3、他は1/2)	26
第22図	石器実測図2 (1/3)	27

I はじめに

1 調査に至る経緯

都市計画道路志免・宇美線は、幅員 25m の福岡県糟屋郡志免町と同宇美町を結ぶ道路である。福岡市東区から志免町・宇美町の中心部を経て太宰府市に至る県道福岡・太宰府線は、朝夕を中心として交通量が多いにも関わらず上下各一車線であり、慢性的な渋滞を引き起こしている。また歩道が無い区間も多く、安全対策が急務である。そうした問題の解消と、回遊性・利便性など生活環境の改善を目的として、新たに計画されたバイパス道路が本都市計画道路である。

福岡県教育庁総務部文化財保護課では、円滑に文化財保護を図るために、福岡県の各部局の施工予定事業を早期に把握し、協議する体制を整えている。本事業もそうした中で提示され、周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの周辺には宇美八幡宮、木川・畠田遺跡、正籠古墳群などが位置する文化財が多い地域であるため、事前の試掘調査が必要とされた。試掘調査にかかる協議は福岡県土整備事務所都市施設整備課と宇美町教育委員会社会教育課、福岡県教育庁総務部文化財保護課の三者で実施した。試掘調査は宇美町教育委員会が対応することとし、用地などにかかる調整が済んだ段階で調査に入ることとした。

試掘調査は平成 21 年 7 月 15 日に実施した。大字宇美 3918 の旧水田にて重機を用いて試掘坑を掘削した。その結果、表土下約 50cm にて中世の土師器などを含む遺物包含層が検出された。これを受けて、字名をとり湯柱遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地として登録を行った。

隣接する大字宇美 3916 - 3・3942 - 5・3945 - 9 番地はアスファルト舗装があったため、舗装を部分的に剥いだ上で、平成 21 年 8 月 27 日に改めて試掘調査を実施した。試掘調査坑では、すぐに水が湧き出す疊層が確認された。すなわち内野川及び井野川の合流点に近い氾濫原と判断され、文化財は存在しないとされた。これにより大字宇美 3918 と隣接する 3917 番地について文化財保護の協議が必要であるとした。

この試掘調査結果を受けて、福岡県土整備事務所にて文化財保護の協議を行ったが、路線は既に固まっているため記録保存の措置をとることとなった。施工時期について、平成 21 年度内の着手が必要とされたため、急遽発掘調査の実施が求められた。宇美町教育委員会では予算的な承認がとれないこともあり、本発掘調査は福岡県教育庁総務部文化財保護課が福岡県土整備部より執行委任を受けて実施することとした。ただ福岡県教育庁総務部文化財保護課も五ヶ山ダム建設にかかる発掘調査など多くの事業を抱えており、結果として 3 人の担当者が入れ替わりつつ調査を進めることとなった。

文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の通知が福岡県福岡県土整備事務所よりなされ、それに対し福岡県教育庁総務部文化財保護課より発掘調査を指示する通知がなされた。

試掘調査から発掘調査に至るまでの文化財保護法に係る事務文書は下記の通りである。



完成した都市計画道路志免・宇美線

試掘調査の結果報告	平成 21 年 8 月 10 日	21 宇教社第 1158 号
埋蔵文化財包蔵地の周知化	平成 21 年 8 月 19 日	21 教文第 8 号 -40
確認調査の結果報告	平成 21 年 9 月 2 日	21 宇教社第 1347 号
文化財保護法第 94 条第 2 項に係る通知	平成 21 年 9 月 15 日	21 福士第 2273 号
同 回答の通知	平成 21 年 10 月 1 日	21 教文第 1 号 -406

2 発掘調査の経過

平成 21 年 12 月 4 日の福岡県土整備事務所担当者と現地協議を行い、翌日には地元に対する説明会が行われた。12 月 7 日に重機を搬入し、表土除去作業を開始した。表土は試掘調査により文化財が確認されなかった隣接地におき、本発掘調査地を一度に調査することとした。雨天により予定より耕作土および上層の堆積の搬出に時間を要したが、12 月 18 日より遺構面が検出され始めた。福岡県土整備事務所より提供された基準点成果簿により遺構記録のための国土座標およびベンチマークの設定を行った。年を跨ぐタイミングとなつたため、発掘作業員による作業は新年になってからとした。

1 月 18 日に現場の安全に関するオリエンテーションを経て発掘作業員とともに遺構掘削作業を開始した。調査区の南西側は一段高い地形となっており、そこから検出作業を進めた。南西区は遺構が希薄であり、木桶を伴う土坑と数条の溝状遺構が確認される程度であった。その先の地形の落ち際に土器を多く含む包含層が堆積していたため、調査区際にトレントを設定し、堆積状況を確認することに努めた（南包含層）。

1 月 20 日には溝状遺構とあわせて、調査区中央部にある地形の落ち込みに形成された遺物包含層（中央包含層）の調査に着手した。溝状遺構からは遺物が出土しなかった。中央包含層では上層からの遺物は少なく、検出面では白磁片が認められた。試掘調査で出土した中世の土師器は、包含層の最上面に形成される包含層に伴うものと判断された。

1 月 25 日から 2 月 4 日にかけては、南包含層および中央包含層の掘削を中心に行った。下層を中心には比較的多くの弥生土器・土師器が含まれることが確認された。堆積状況に関して記録をとり、写真撮影を行った。

2 月 5 日より調査区北側の堆積状況の確認を行った。これまで地山と判断していた黄灰色土の下層に黒色土が堆積する状況が確認されたため、調査区西壁に沿ってトレントを設定し、堆積状況を確認することとした。下層に含まれる遺物はわずかであるが、石器等が確認され、上層包含層が形成される前にも文化財が存在することが確認された。



重機による表土除去作業



発掘作業風景

2月15日には、気球を用いた全体空中写真撮影を実施した。また平板測量により旧地形の測量に着手した。

2月24日で遺構の掘削作業が基本的に終了した。その後、図面・写真等による記録を行い、3月5日にすべての作業を終了した。3月8日付け21教文第184号-14にて埋蔵物発見届を福岡県柏原警察署に届け出た。

3 調査の体制

発掘調査は福岡県教育委員会が事業主体となり、整理作業・報告書作成については平成23年度の機構改革により九州歴史資料館が事業主体となった。平成21年度の発掘調査および平成27年度の整理作業関係者は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

平成21年度

<総括>

教育長	森山良一
教育次長	亀岡 靖
総務部長	荒巻俊彦
文化財保護課長	平川昌弘
副課長	池邊元明
参事兼課長技術補佐	小池史哲(調査) 伊崎俊秋

課長補佐

前原俊史

<庶務>

管理係長 富永育夫

主事 野田 雅

<調査>

調査第一係長 吉村靖徳(調査)

主任技師 岸本 圭(調査)

九州歴史資料館

平成27年度

<総括>

館長	杉光 誠
副館長	伊崎俊秋
参事	飛野博文
企画主幹(総務室長)	塩塚孝憲
企画主幹(文化財調査室長)	吉村靖徳(報告)
技術主査(文化財調査班長)	秦 憲二
技術主査(保存管理班長)	加藤和歲

<庶務>

企画主査(総務班長) 中村満喜子

事務主査 宮崎奈巳

事務主査 西村知子

主事 秦 健太

<整理報告>

技術主査 岸本 圭(報告)

主任技師 岡田 諭(整理)

甘木歴史資料館副館長 小池史哲(報告)

発掘調査および整理・報告書作成作業にあたり、宇美町教育委員会をはじめとして御理解・御協力をいただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。

II 地理的・歴史的環境

遺跡の所在する糟屋郡宇美町は、福岡県の中北部に位置する。東部から南東部にかけて、標高936mの三郡山を頂とする標高800～900mの三郡山脈が走る。南部は標高410mの大城山を頂とする四王寺山脈が走る。それらを源とする河川が北西方向に流れ、福岡市にて多々良川と合流し、博多湾に注ぐ。西部には月隈丘陵が低く伸びるが、それにより西の御笠川・那珂川水系の福岡平野と隔てられている。

本遺跡は四王寺山脈から北に長く伸びる低い丘陵の先端に位置する。北側に流れる井野川と、南側に流れる内野川に挟まれた微高地であり、これら両河川は遺跡の西側で合流する。試掘調査の結果をみてもわかる通り、遺跡のすぐ北西側は河川の作用による疊層帯となっている。

調査地の東から南側にかけては現在は宅地となっており、一段高い平坦な地形をなしている。ここは昭和30年代後半から40年代前半にかけて大規模な耕作整理が行われ、大きく地形が改変されているという。その際に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて多くの土器が出土しており、木川・畑田遺跡として知られている。

遺跡の北側には、神功皇后が後の応神天皇を産んだ地とされる宇美八幡宮が鎮座する。境内には安産や育児にまつわる様々な伝承が残り、福岡県の無形民俗文化財にも指定されている。「湯方神社」や「湯蓋の森」にみえるように産湯にまつわる名称が散見されるが、本遺跡の所在する字名「湯柱」もそれに関わるものであろうか。

本遺跡の南側、内野川を挟んだ丘陵先端部には1基の前方後円墳を含む正龍古墳群が立地している。正龍3号墳は古墳時代後期に築かれた全長約30mの前方後円墳であるが、この時期以降を中心、山中では多数の群集墳が築かれており、宇美觀音浦古墳群や湯湧古墳群等、発掘調査により概要が明らかとなっている。山の西側では近年の発掘調査により新羅系の土器が多くみられる特徴的な状況があり、太宰府側の四王寺山には群集墳がみられない等、古墳時代から飛鳥時代にかけて



第1図 宇美町の位置



の歴史を考える上で、重要な地域である。

本遺跡の南、四王寺山塊には、663年の白村江の戦いの敗戦を機に防衛体制の拠点として築かれた古代山城である大野城が宇美町・太宰府市・大野城市にまたがって所在する。平成15年の記録的な大雨により甚大な被害を被ったが、新たな城門の確認等、新知見が多く得られた。また遺跡の西、井野山を挟んだ大野城市内では、区画整理事業等により新たな発見が相次いでいるが、特に新羅土器を伴う墳墓が特筆される。

四王寺山は古代より続く山岳信仰の場としても著名である。山中に残る寺院跡や坊跡、出土する経筒はその繁栄を今に伝えている。宇美町内では、正樂遺跡や一滴遺跡の調査が近年行われ、中世の寺院跡の実態が具体的になりつつある。重要文化財に指定されている四王寺山経塚出土品は北部九州を代表する経塚遺宝である。また南北朝期の動乱や、岩屋城に代表される戦国時代の攻防等、歴史の様々な舞台に登場する。宇美町内にも高橋鑑種の支城である頭巾山城等、中世山城が分布している。

宇美町教育委員会では、平成22年度から24年度にかけて町内の遺跡詳細分布調査が実施され、分布地図が刊行された。宇美町内では、石炭の農地整理事業や石炭採掘産業により、多くの文化財が失われているが、旧石器時代に始まる数多くの文化財が存在することが、改めて明らかにされている。

【主要参考文献】

宇美町誌編纂委員会編 1975 『宇美町誌』

九州国立博物館・太宰府市教育委員会 2015 『新羅王子がみた大宰府』

九州歴史資料館 2015 『特別展 四王寺山の1350年－大野城から折りの山へ－』

松尾尚哉・平ノ内幸治編 2013 『宇美町内遺跡等分布図』宇美町文化財調査報告書第19集



湯方神社と子安の石



光正寺古墳からみた湯柱遺跡の立地



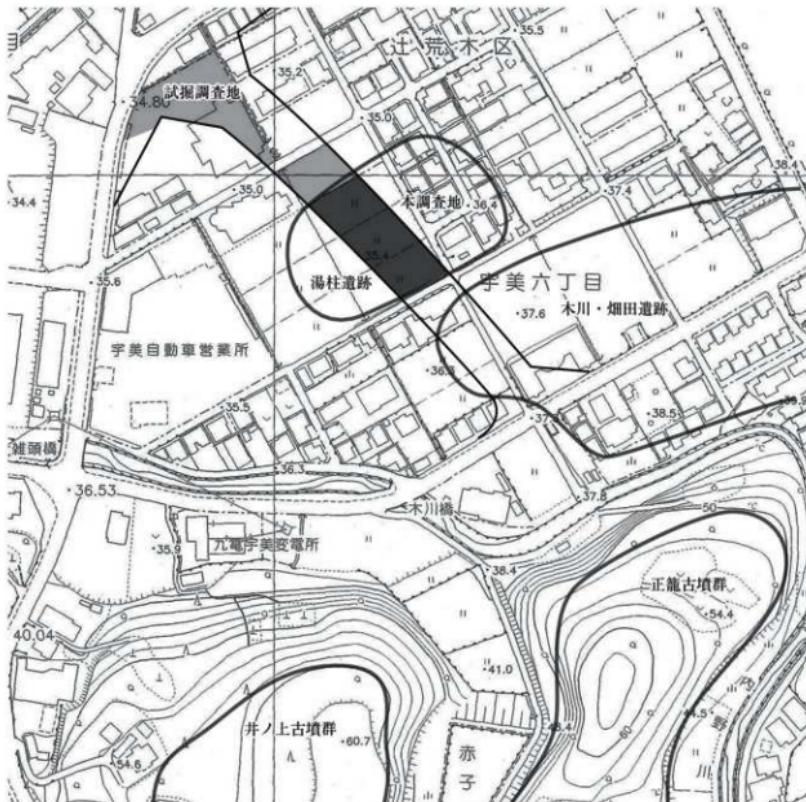
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

III 調査の記録

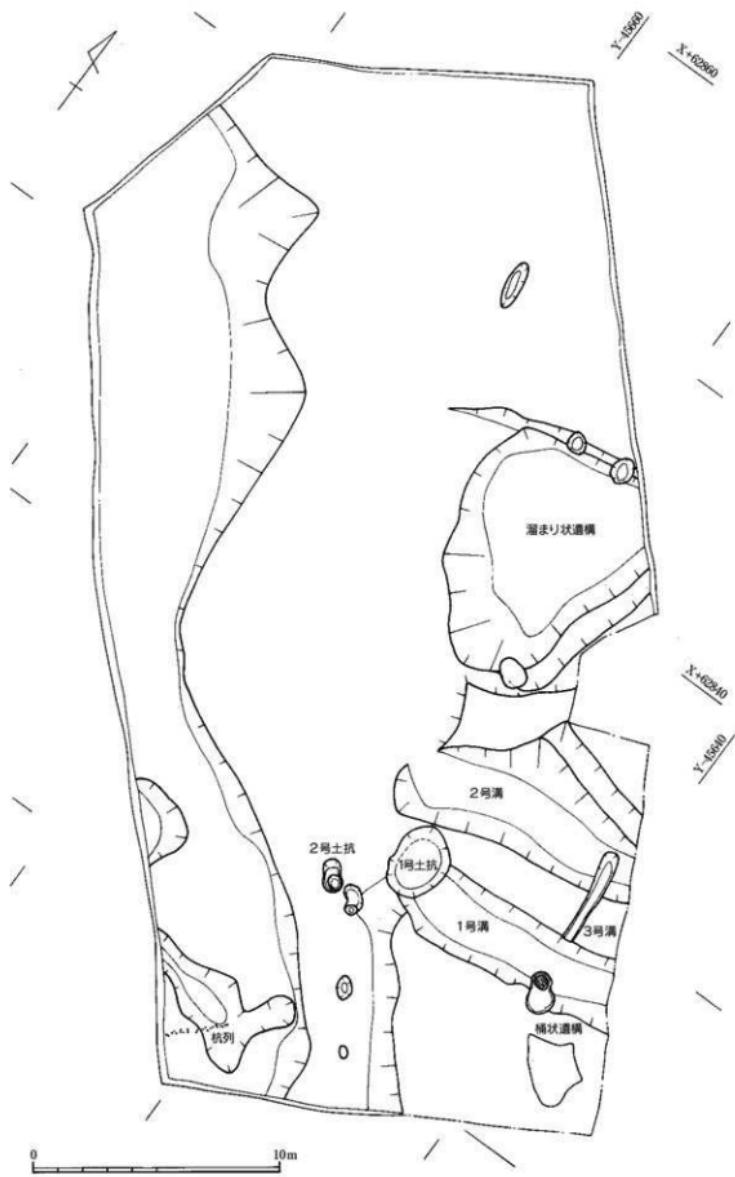
1 遺跡の概要

湯柱遺跡は東側から延びる台地縁辺部と西側に入る谷部に立地し、発掘調査地はその変換点にある。調査区の東から西にかけて、また、南から北に向けて傾斜し、西壁際は谷地形となる。遺構面の標高は、最も高い南東隅部で35.3m、南西隅部で34.5m、最も低い北西隅部で34.0mを測る。

本調査地は調査前に水田として利用されていた。基本層序は、灰褐色土（厚さ30cm）、暗茶褐色粘質土（厚さ30cm）の下が遺構面で、西側谷部では暗灰褐色土・黒色腐植土の下部に灰色粘土と灰色シルトを中心とする層が互層となる。黒色腐植土よりも上層には砂礫層が部分的に見られるが、その他は粘土や粘質土などが主体となる。



第3図 遺跡周辺地形図 (1/2,500)



第4図 遺構配置図 (1/200)

調査の結果検出した遺構は土坑2基、桶状遺構1基、溝2条、溜まり状遺構、杭列とピット数基である。

2 検出された遺構

土坑

1号土坑（第6図）

発掘区の南部で検出した。1号溝状遺構の西端部と重複し、1号溝状遺構に切り込んでいる。平面形は不整円形で、長さ2.9m、幅2.35m、深さ0.3mを測る。埋土は質の異なる茶褐色砂質土の下に粗い砂礫がレンズ状に堆積し、その下層は黄褐色の砂礫土の地山である。

2号土坑（第6図）

発掘区の南部、1号土坑の西側で検出した。隅丸長方形の南側をさらに円形に掘り込んだ形状である。長さ2.7m、幅1.6m、深さはテラス部分までが0.6m、最も深い部分で1.4mを測る。北壁は緩く立ち上がる。

桶状遺構（図版2-3、第5・6図）

発掘区の南東隅部で検出した。1号溝状遺構を切る。長円形と円形を連ねた形状で、円形の掘形には桶を据えている。桶は高さ15cmほどの曲物が遺存していたのみである。底板は径約52cmで、三枚からなる（第5図）。材は杉であろうか。南側の長円形の部分は曲物の床面よりも深くなっているが、下層が砂層であるため掘りすぎてしまった可能性が考えられる。

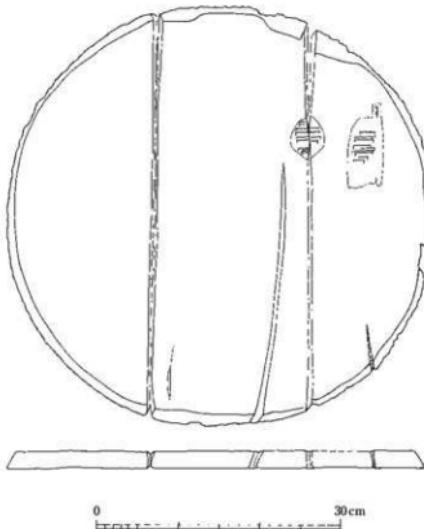
溝状遺構

1号溝状遺構（第4図）

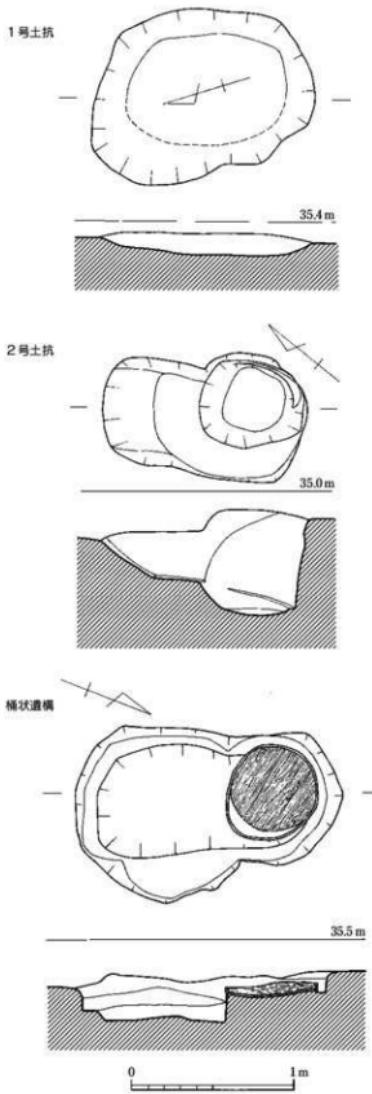
発掘区の南東部で検出した上端幅3.0mの溝で、長さ10.0m分を確認した。東側は発掘区外に延び、西側は1号土坑に切られるがこの土坑の部分で収束している。深さは0.3mほどで、底面はほぼ水平である。埋土は砂である。埋土から見ると自然流路と思われる。

2号溝状遺構（第4図）

発掘区の南東部、1号溝の北側で検出し、これと平行するように走っている。東側は発掘区外に延び、西側は収束する。上端幅3.5～5.7mで、下端は1.2～2.3mを測る。床面は西から東側に向かって傾斜し、深さは0.3mほどである。埋土は砂礫で



第5図 桶状遺構桶底板実測図 (1/6)



第6図 土坑・桶状遺構実測図 (1/30)

ある。埋土の状況から見ると一気に埋没した自然流路と思われる。

3号溝状遺構（第4図）

発掘区の南東部で検出した。1号溝状遺構と2号溝状遺構を切っている。幅0.3～0.5m、長さ3.0m、深さ0.2mほどである。図化する前に1号溝状遺構を掘削してしまったが、桶状遺構のところで収束しているため、両者が一連の遺構である可能性もある。

溜まり状遺構（図版3-1、第4図）

発掘区の中央部東壁際で確認し、東側は発掘区外に延びる。平面形は不整形で、長軸長10.0m、短軸長8.5mを測る。底面は描り鉢状に中央部が最も深く、深さ0.5mを測る。埋土は茶褐色砂質土で遺物は出土していない。

谷（図版3-2・3、第4・7図）

発掘区の西壁際に沿って東側の肩の部分を確認した。西側に向かって傾斜する谷もしくは地形の落ち際である。埋土は上層が黒色土で、その下に1～2cmの薄い黒色腐植土を挟み、下層が灰色の粘土や灰色シルト層となる。また、北半部では底面直上に厚さ10cmほどの腐植土層が存在する。検出段階で確認した地山の露出面で「南包含層」と「中央包含層」に分けて遺物を取り上げたため報告もそれに拠っているが、出土遺物の時期からみても同一のものと考えてよい。遺物は中央包含層では下層から多く出土したが、南包含層では逆に上層の黒色土から多く出土し、黒色腐植土の上面に集中していた。

谷の南部では北東から南西方向、つまり谷に直交する方向に2.6mにわたって木杭が並んでいた（第7図）。木杭は2cm～4cmほどの太さで、杭列の中央部には60cmほどの空間があるが、それ以外の部分は一定の間隔を保って打ち込まれている。この杭列の性格について断定することは難しいが、谷に伴うことから堰のような役割を果たしていたことも考えられよう。

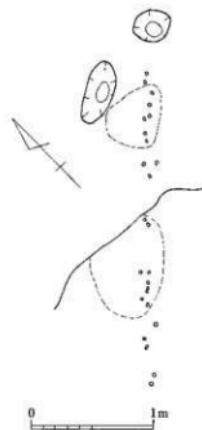
3 出土遺物

中央包含層出土土器（図版4、第8～12図）

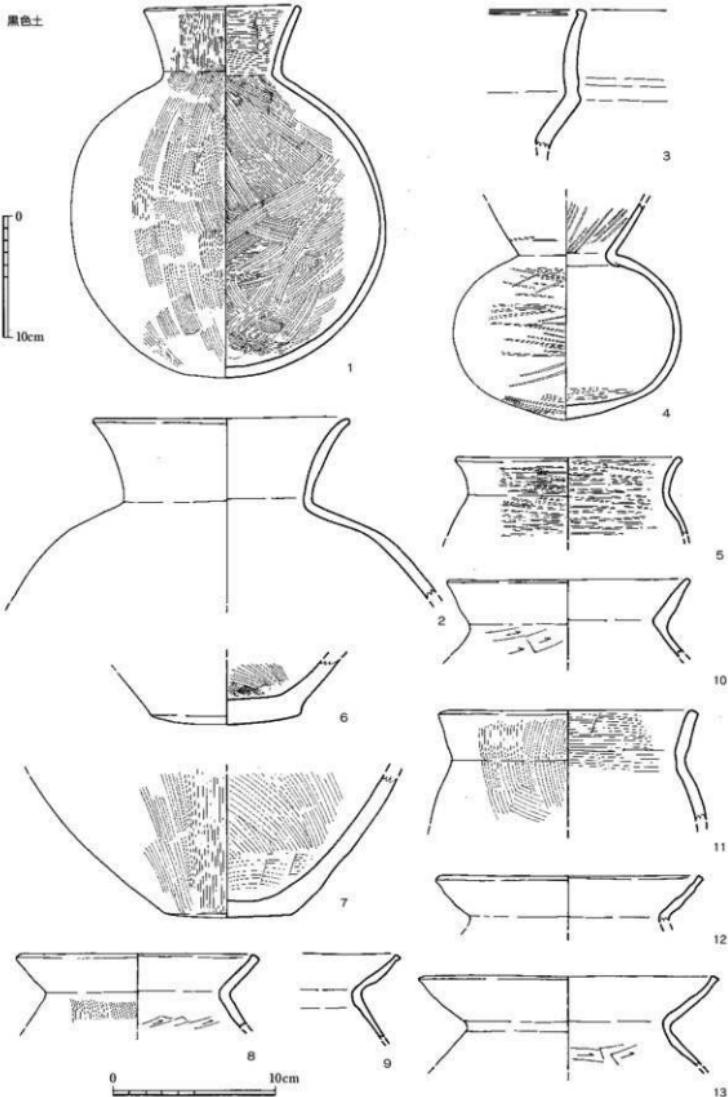
1～25は黒色土層から、26～57は灰色土層から出土した。

1～5は壺。1と2は頸が締まった直口壺である。1は内外面とも細かいハケを施す。2は口縁部がやや外反する。磨滅が著しく調整不明。3は二重口縁壺の破片。端部は面をなし、内側に段をなす。4は小形丸底壺の精製土器。体部は球形で、底部は尖り気味である。調整は口縁部内面が縱方向の細かいミガキ、体部外面は横方向の細かいミガキ、底部内面には板状工具によるナデ痕が残る。体部外面から底部にかけて斑が残る。5は口縁部がS字状に緩く開く壺の精製土器。調整は内外面とも横方向の細かいハケ。6・7は凸レンズ状を呈する底部の破片で、7は甕の可能性もある。調整は6の内面がハケ、7は内外面ともハケ。

8～18は甕。8・9・12～14は口縁端部をつまみ出している。調整が確認できるものは外面がハケ、内面はケズリ。11は頸部が締まらないもので鉢形に近い。口縁端部に面をなす。調整



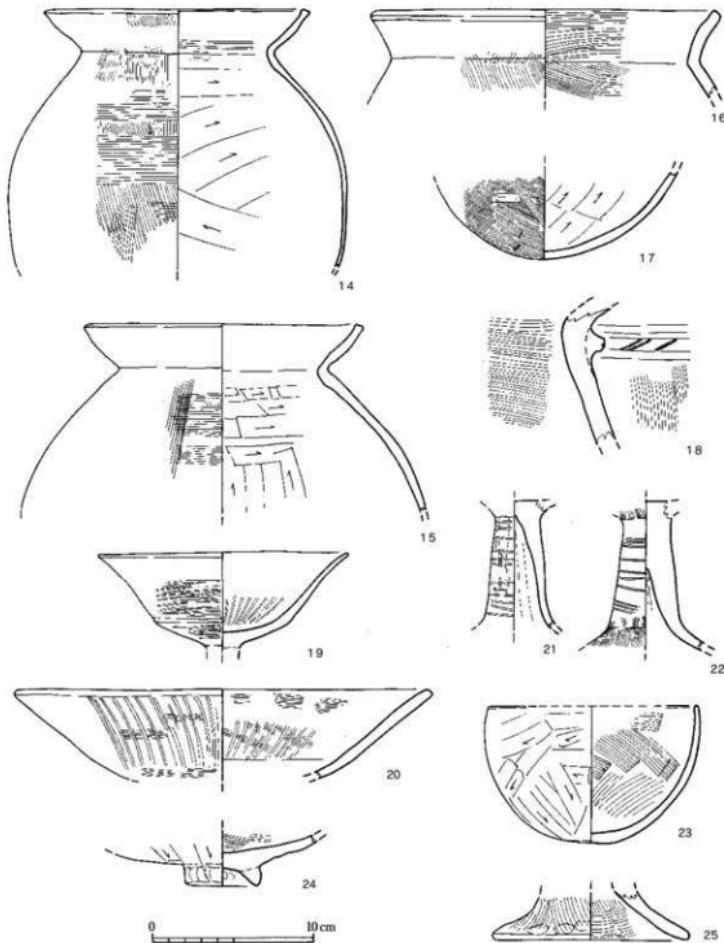
第7図 杭列実測図 (1/40)



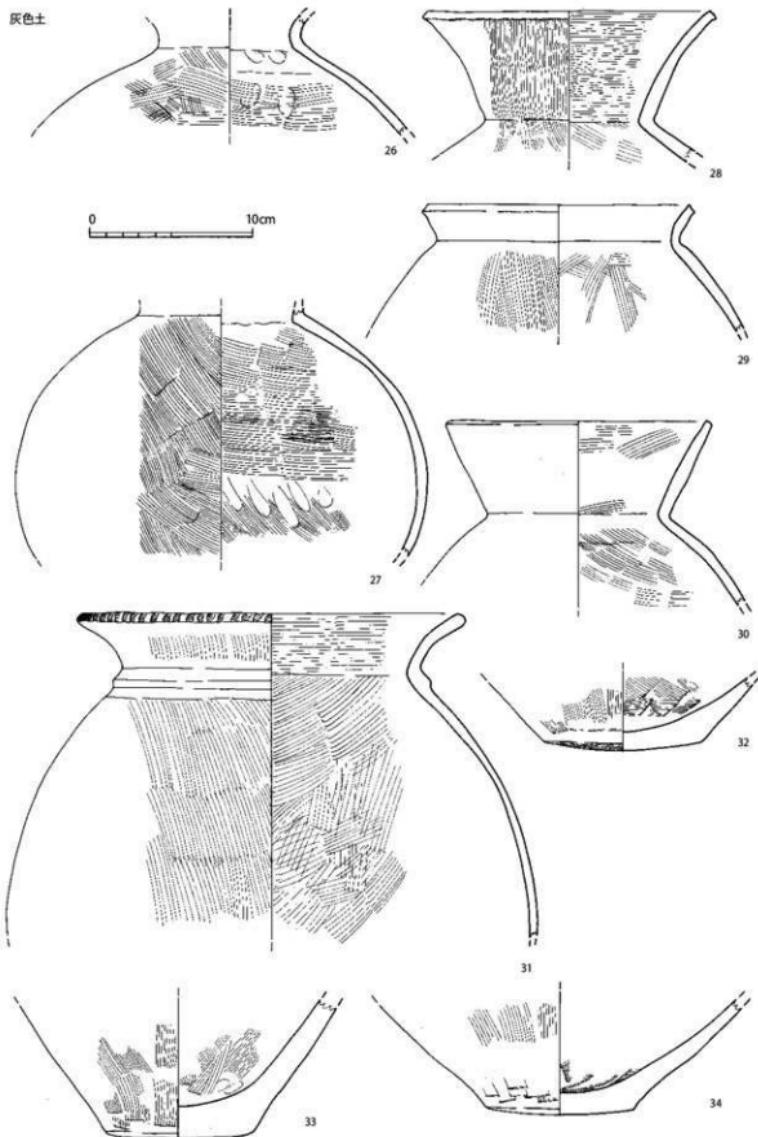
第8図 中央包含層出土土器実測図1 (1は1/4、他は1/3)

は口縁部と体部外面がハケ、体部内面はナデ。16はく字形口縁。調整は体部と口縁部内面がハケ、口縁部外面はヨコナデ。17は底部で体部外面は細かいハケ、内面はケズリ。18は大型壺の頸部の破片で、口縁部と頸部の境に断面台形の突帯を貼付する。突帯には板状工具端部の押圧により刻みをいれる。色調は黄白色を呈する。甕棺の破片であろうか。

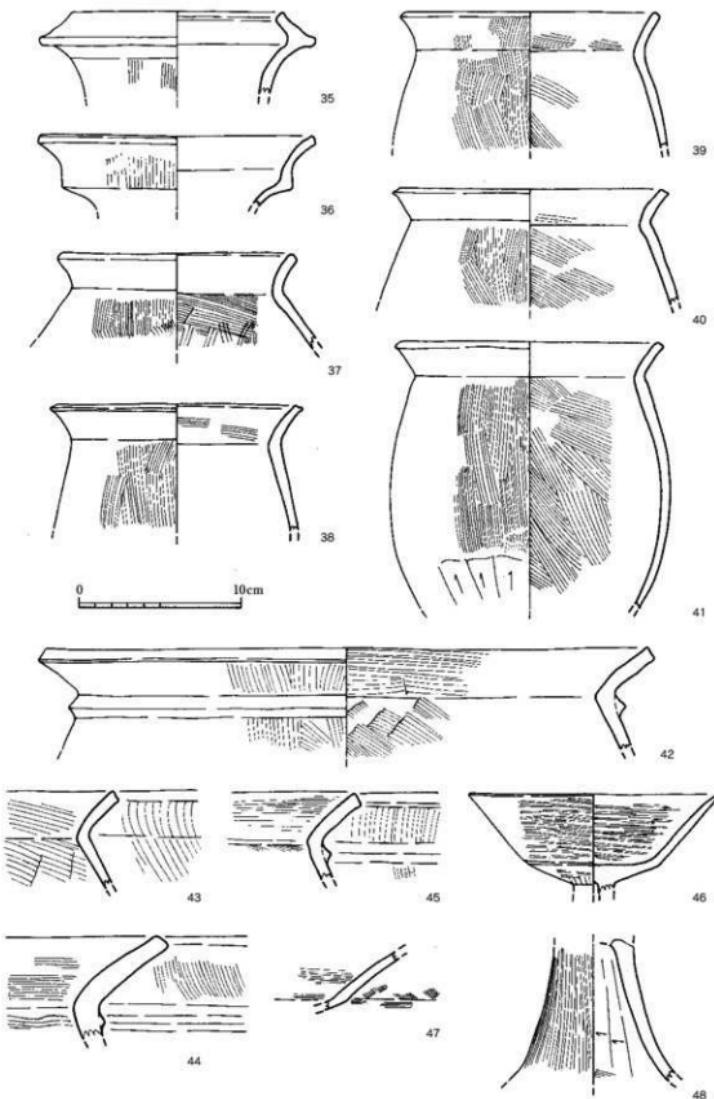
19・20は高杯。19は小形で、口縁部がやや外反する。調整は外面が横方向の細かいヘラミガキ、



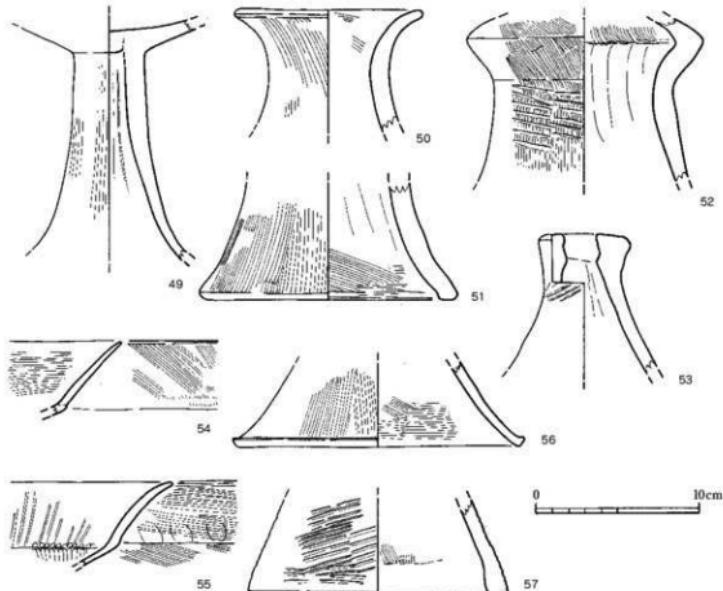
第9図 中央包含層出土土器実測図2 (1/3)



第10図 中央包含層出土土器実測図3 (1/3)



第11図 中央包含層出土土器実測図4 (1/3)



第12図 中央包含層出土土器実測図5 (1/3)

内面には縦方向のミガキを施す。20も杯部で、直線的である。調整は内外面とも細かいハケの後、放射状の暗文を施す。21・22は脚柱部。21・22とも外面は縦方向に削った後に横方向に粗いヘラミガキを施す。

23は鉢。球形の体部で底面は平底に近くわずかに凸レンズ状になる。調整は外面がヘラケズリ、内面はハケ。24は脚付の鉢とみられる。断面三角形の径の小さな高台を貼付する。調整は外面が縦方向のヘラケズリ、内面はハケ。

25は脚付鉢の脚裾部か。外面裾部に指頭圧痕が残る。

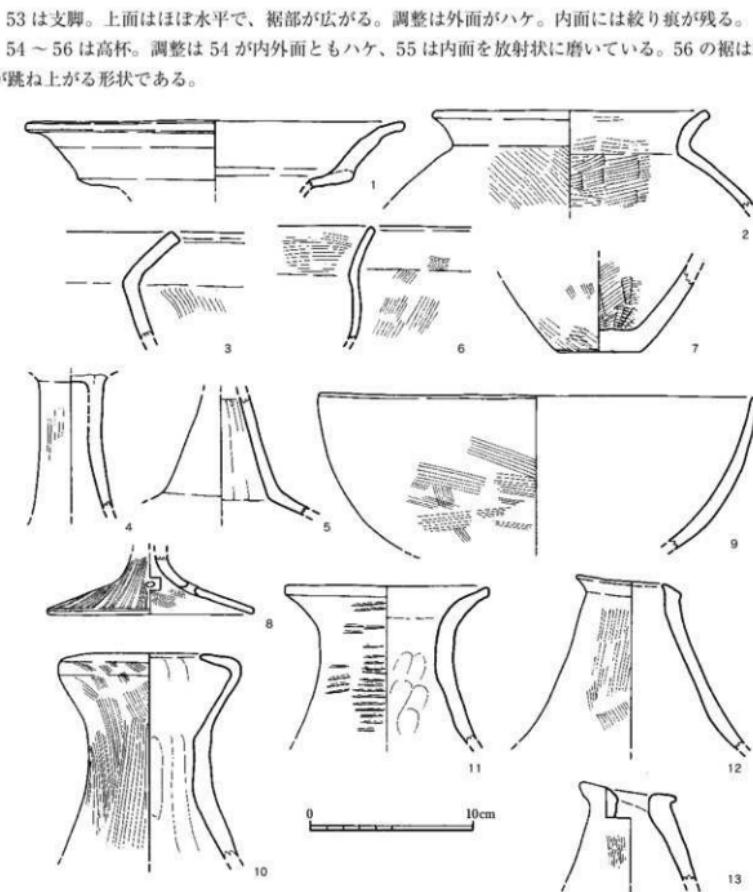
26～36は壺。26・27は直口壺もしくは二重口縁壺。頭部が締まる。29は最大胴径がやや下位にくる。調整は外面が斜め方向のハケ、内面は横方向の細かいハケである。26の頭部内面と27の胴部内面に指頭圧痕が残る。28は締まった頭に大きく外反する口縁を持つものである。口縁端部は面をなし、外方にわずかにつまみ出す。29はく字形口縁の壺とした方がよいか。内外面とも粗いハケを施す。30は球形の体部に外傾する長い口縁を持つ。全体的に磨滅が著しいが、細かいハケが残る。31は長胴に外反する口縁を持つ。頭部に断面三角形の低い突帯を持つ。口縁端部は丸く収め、板状工具により刻みを入れている。調整は内外面ともハケ。32～34は底部。33は平底で、32と34はわずかに凸レンズ状になる。調整は内外面ともハケ。35・36は複合口縁壺。35は屈曲部が外方に張り出す。

37～45は甕。いずれもく字形の口縁形状で37・39・41のように端部を丸く收めるものと38・

40 のように内側につまみ上げ気味にヨコナデし、面をなすものがある。調整はいずれも内外面ともにハケを行う。42 は口径 38cm の甕。口縁屈曲部に接して断面三角形の突帯をまわす。突帯、口縁端部とも角張っている。調整は内外面ともハケ。45 と同一個体の可能性もある。44 も屈曲部下に断面三角形の突帯を貼付する。

46～49 は高杯。46・47 は杯部。46 は内外面ともに横方向の細かいミガキを施す。48 は脚部で、内面はケズリのような工具ナデを行っている。49 の調整は外面がハケ、内面には絞り痕が残る。

50～52 は器台。52 は口縁部が袋状になる。調整は外面がタタキの後ハケ、内面にはなでによる連続的な指頭痕が残る。



第13図 南包含層出土土器実測図1 (1/3)

57は支脚。裾端部が肥厚する。調整は外面がタタキ、内面にはハケの痕跡が残る。

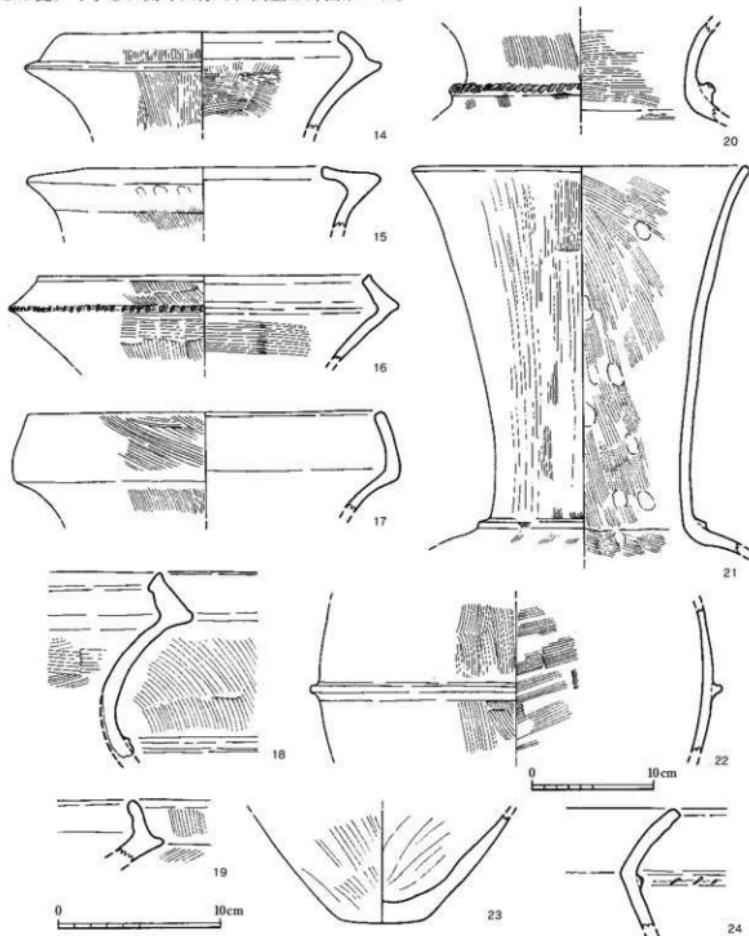
南包含層出土土器（図版5・6、第13～17図）

1～13は黒色土層、14～50は灰色土層から出土した。

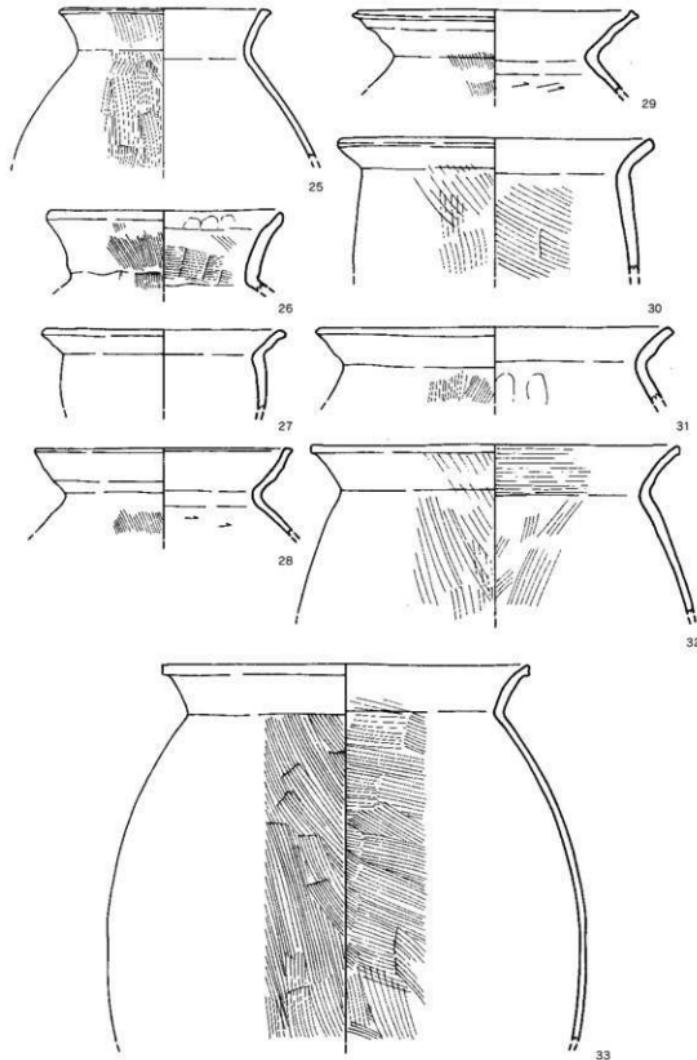
1・2は壺。1は二重口縁壺で、口縁部が大きく開く形状となる。調整はヨコナデで、内面はナデ。

2は球形の体部に外反する短い口縁がつくもの。

3は壺。く字形に開く口縁で、調整は外面がハケ。



第14図 南包含層出土土器実測図2 (22は1/4、他は1/3)

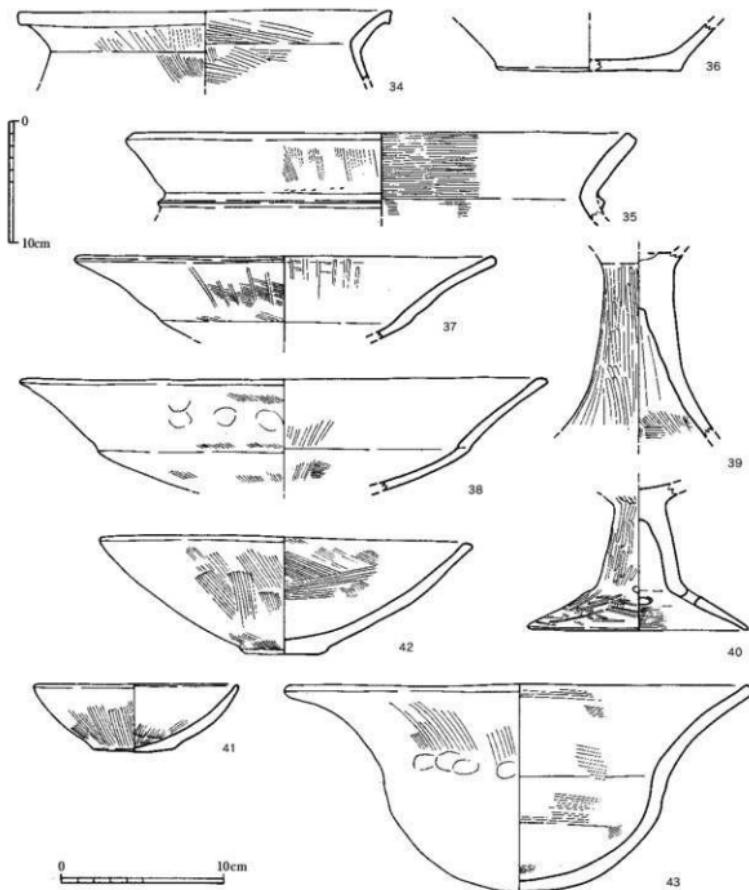


0 20cm

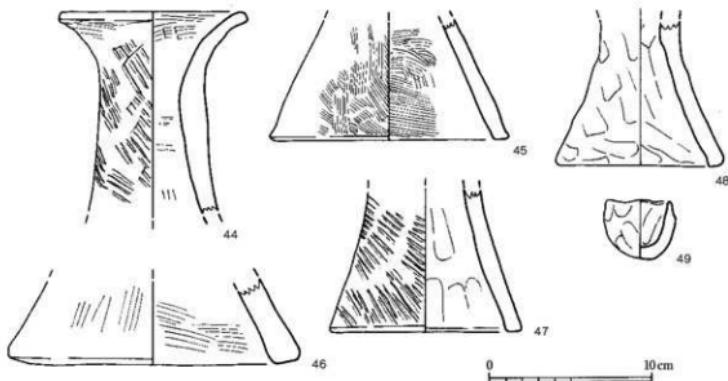
第15図 南包含層出土土器実測図3 (1/3)

4・5は高杯の脚部。4は緩く開くもの、5は中位で屈曲して開くもの。5の内面は工具ナデ。6～9は鉢。6・7は堺の可能性もあるが、6は口縁の屈曲が弱いことや傾きに若干不安が残るものとの浅い器形になることから鉢とした。7は平底で、調整は外面が板状工具によるナデ、内面はハケ調整。9は口径27.0cmに復元できるボル形の鉢。調整は外面が不整方向のハケ、内面はナデ。10・11は器台。10の口縁部は袋状となる。袋状になる部分の下半は指頭によるナデ上げで器壁が薄く仕上がっている。調整は外面がハケ、口縁部はナデ。内面はナデで、指頭圧痕が明瞭に残る。11の調整は外面がタタキ、内面はナデで指頭圧痕が明瞭に残る。

12・13は支脚。ともに上面が傾斜している。調整は外面がハケ。



第16図 南包含層出土土器実測図4 (35は1/4、他は1/3)



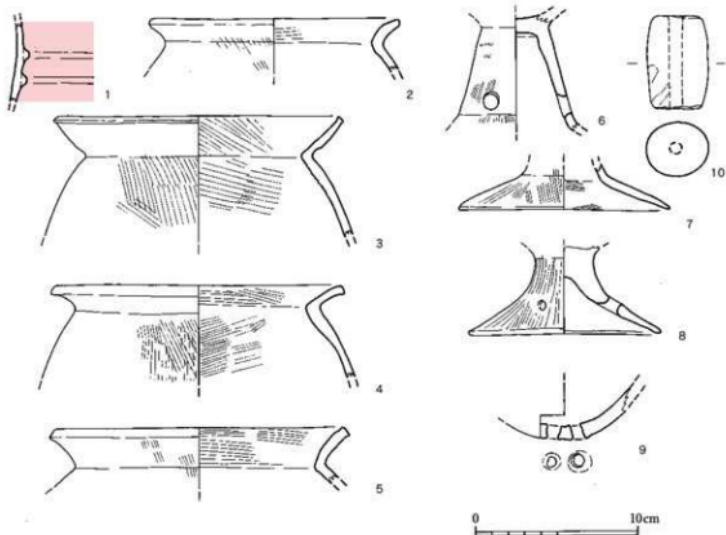
第17図 南包含層出土土器実測図5 (1/3)

14～22は壺。14～16は複合口縁壺。14は口縁部が袋状になり、口縁部と頸部の境が外方に大きく張り出す。調整は内外面ともハケ。15も袋状になるが丸みを持たず上面が平坦になる形狀である。内面には指頭圧痕が残る。16は口縁端部を上方につまみ上げ、屈曲部に工具端による刻みを施す。調整は内外面ともハケ。17は外反する頸部に内湾する口縁がつくもの。調整は外面がハケ、内面がヨコナデ。18も複合口縁壺。口縁部は16に似た形狀で端部は面をなすシャープな作りであるが頸部は大きく開き、体部との境に低い断面四角形の突帶を貼付している。20は長頸壺と思われる。頸部の突帶には工具端の押圧による刻みを密に入れる。調整は内外面ともハケ。21は長頸壺。頸部に断面三角形の突帶を貼付する。ひじょうに薄い作りである。調整は外面が縦方向の細かいハケ、内面は斜位のハケ。胎土は精良である。22は胴部。胴部最大径のやや下位に断面四角形の突帶を貼付する。23は凸レンズ状に近い平底の底部で、壺になるのかもしれない。調整は外面がハケ、内面は工具ナデ。

24～37は壺。24は外反気味の口縁部で、口縁部と胴部の屈曲部に断面三角形の刻み目突帯をもつ。25・26は頸部がしまったタイプで体部は球形になる。27は体部が張らない浅い壺。28・29は球形の体部に外傾する口縁がつくもの。28の口縁部は内湾し、端部を外方につまみ出す。28・29とも口縁部のつくりがシャープで、調整は外面がハケ、内面はヘラケズリ。29の外面には煤が付着している。30は体部が張らずに直線的になるもの。32・33は口縁端部を下方につまみ出す。33の器壁は薄く、つくりも丁寧である。内外面とも黒化している。30～34の調整は内外面ともハケ。36は底部。調整は内外面ともナデ。

37～40は高杯。37の調整は内外面とも横方向の細かいハケの後放射状の暗文を施す。38は内外面ともハケ。39は脚柱部で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は裾部分がハケで、上方は絞り痕が残る。40は脚付鉢か。短い脚柱に屈曲して聞く裾となる。調整は外面がヘラミガキ、内面は脚柱部がナデ、裾部分が細かいハケ。穿孔は焼成後で4箇所にある。

41～43は鉢。41は小形で、体部はやや内湾しながら立ち上がる。底部は凸レンズ状に近い平底である。調整は内外面ともハケ。42の体部は直線的に開く。平底。調整は内外面ともハケ。43は球形の体部に大きく聞く長い口縁がつくもので、体部と口縁部の境は不明瞭である。調整は部



第18図 砂疊層出土土器・土製品実測図 (1/3)

分的にハケが残り、また、内面の体部と口縁部の境に指頭圧痕が残っている。全体的に器壁が厚い。

44～49は器台。44は細身の体部で口縁部は大きく開く。44・47は外面にタタキ痕跡が明瞭に残っているが、45・46は内外面ともハケ調整である。47の内面は指ナデの痕が残る。

48は支脚。外面は板状工具によるナデ仕上げ、内面はナデである。

49は手捏ねの小さな碗で、成形時の指頭圧痕が残っている。

砂疊層出土土器・土製品（第18図）

1は壺の胴部。断面台形の突帯を二条貼付している。胎土は精良で外面に丹を塗布する。

2～5は甕。2のように口縁端部を丸く收めるもの、3の用に口縁端部を上方につまみ上げるシャープなつくりのもの、4のように端部を丸く肥厚させるものなどがある。

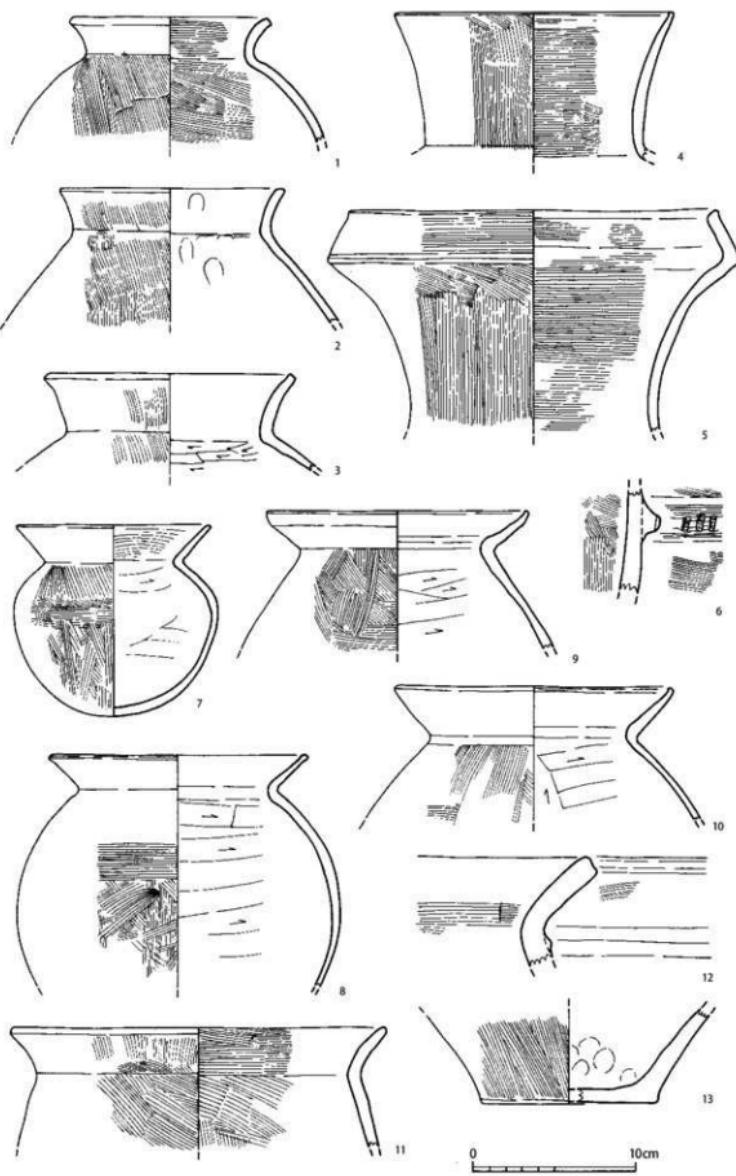
6は高杯の脚柱部。下位に径1.1cmの焼成前穿孔を三方に行う。7は脚裾部中位で屈曲して大きく開く。調整は内外面ともハケ。8は焼成前穿孔を三方に行う。外面の調整はハケ。

9は小形の甕とも思われるが、小片のため全形が知れない。小形の瓶であろうか。底部に焼成前穿孔を二箇所に行う。

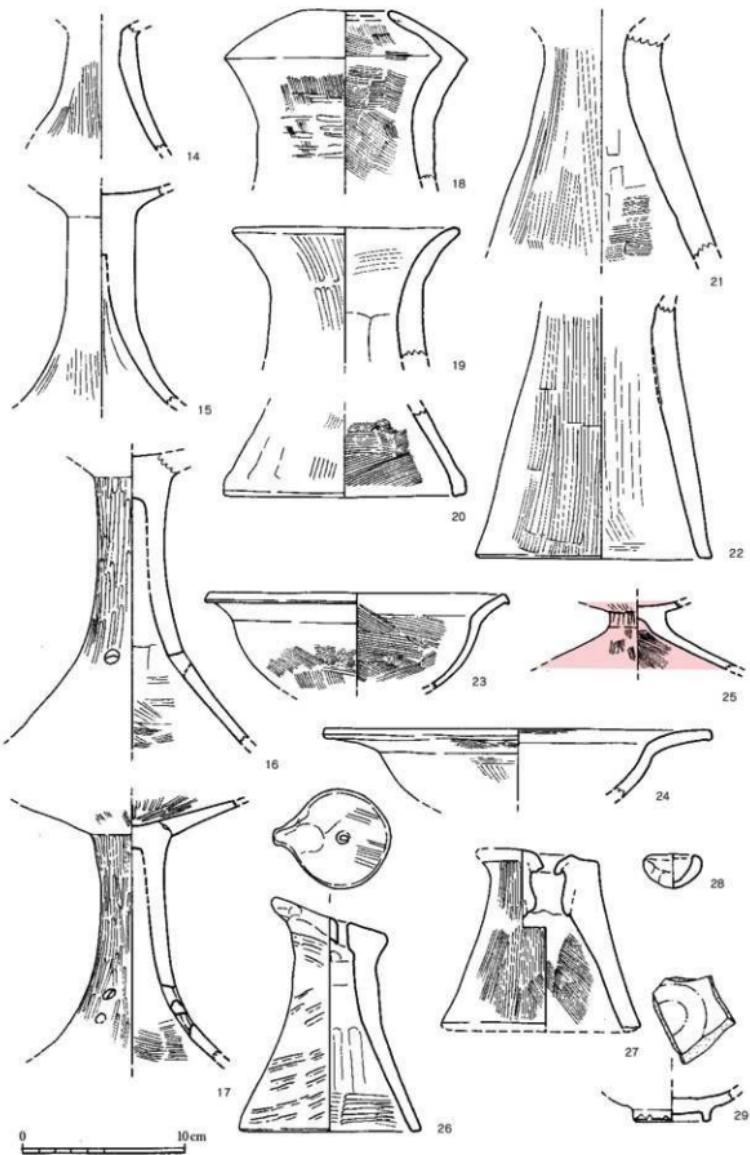
10は管状土錐。長さ5.7cm、径2.8cmを測る。孔径0.7cm。調整はナデ。

その他の層位出土土器（図版5、第19・20図）

1～6は壺である。1～3は球形の体部に短く外反する口縁（1・3）、直線的に開く口縁がつく（2）。3は口縁端部をわずかにつまみ上げている。調整は外面はいずれもハケで、内面は1がハケ、2がナデ、3はケズリである。4は長頸の壺で、口縁端部は薄く仕上げられ、また面をなし



第19図 その他の層位出土土器実測図1 (1/3)



第 20 図 その他の層位出土土器実測図 2 (1/3)

ている。5は複合口縁壺。大きく開く頸部に内傾する直線的な口縁がつく。調整は内外面ともハケ。6は体部の破片で、小片のため傾きにやや難がある。高い突帯を貼付し、密に刻みを施している。

7から13は壺。7は小形の壺で体部の多さの割に口縁部が長い。町営は外面と口縁部内面がハケ、体部内面はヘラケズリ。8～10は同様の器形で、9・10は口縁端部内面に段を有する。調整はいずれも外面がハケ、内面はヘラケズリ。11・12はく字形に緩く屈曲するものである。12は大型で口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。13は平底の壺。器壁が薄い。調整は外面がハケ、底部内面に指頭圧痕が残る。

14～17は高杯の脚柱部。調整は14・15の外面はハケ。16・17の外面はヘラミガキで、内面の裾部はハケ。16の脚柱部上半は工具ナデ。17の裾部には上下二段の焼成前穿孔が三方にあけられる。24は高杯の杯部。杯部上半で屈曲して外方に延びる長い口縁がつく。

18～22は器台。18は口縁部が袋状になるもので、体部と口縁部の境は明瞭な稜をなしている。調整は外面がタタキ後縦方向のハケ、内面は細かいハケ。19は菱形で調整は外面が粗いハケ、内面はハケである。20～22の外面の調整はハケ。内面は21の状半部は工具ナデ、下半がハケ。22な指ナデである。

23は鉢。球形の体部に外反して斜め上方に延びる口縁がつく。調整は内外面ともハケ。25は脚付鉢。口縁部と脚裾部を欠いている。調整は外面がヘラミガキ、鉢の内面は磨滅により調整不明。裾部はハケである。内外面に丹を塗布している。

26・27は支脚。ともに上面に穿孔を行っている。26は上面が傾斜する。調整は外面がタタキ、内面の上方は工具ナデ、裾部はハケ。27は上面がわずかに傾斜している。調整は内外面ともハケ。

28は小形の手捏ねの椀。

29は白磁碗の高台部分。見込みは輪状に搔き取っている。胎は精良で内外面に釉を施す。豊付は露胎となる。

石器（図版6、第21・22図）

石器の出土量は少なく、剥片が少ないとや風化が著しいものが多いことから、本遺跡で主体を占めるものではなく、包含層中に流れ込んだもの、ないしは当該時期の遺跡が形成されていたものの早い段階に河川の作用等により失われたものではないかと考えられる。

1は安山岩製の凹基式の石鎚で、先端は古くに欠損する。風化が著しく、調整の稜が甘くなり、灰白色を呈する。基部のえぐりは深い。北部遺構検出面から出土。

2は安山岩製の石匙。つまみ部は古くに欠損する。風化が進み、灰白色となる。北部灰茶褐色砂層から出土。

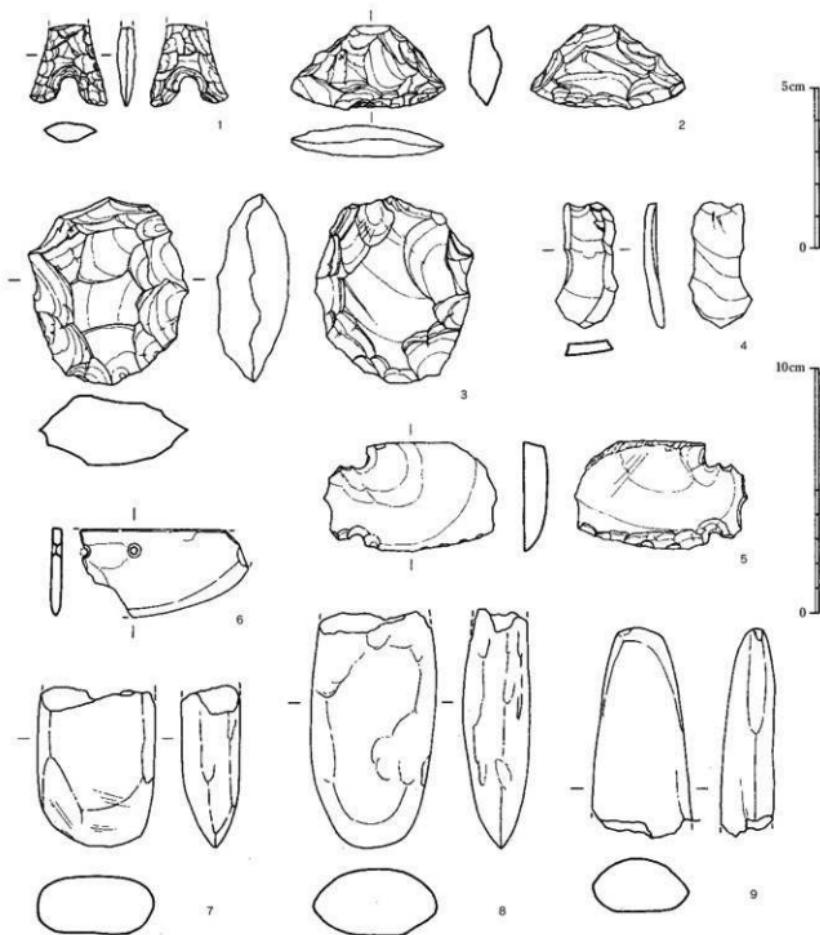
3は安山岩製のスクレーバー。周縁を丸く成形するよう粗く剥離させる。南端トレンチから出土。

4は安山岩製の綫長剥片。風化が進み、灰白色となる。中央包含層西側の灰色土から出土。

5は安山岩製のスクレーバー。図面上部には自然面を残す。成形のための剥離はほとんどせず、剥片の一辺に刃部をつくる細かな剥離を施している。調査区西壁壁に設けたトレンチの下面から出土した。

6は石包丁。凝灰岩製でローリングを受け磨滅が進む。中央包含層灰褐色土から出土。

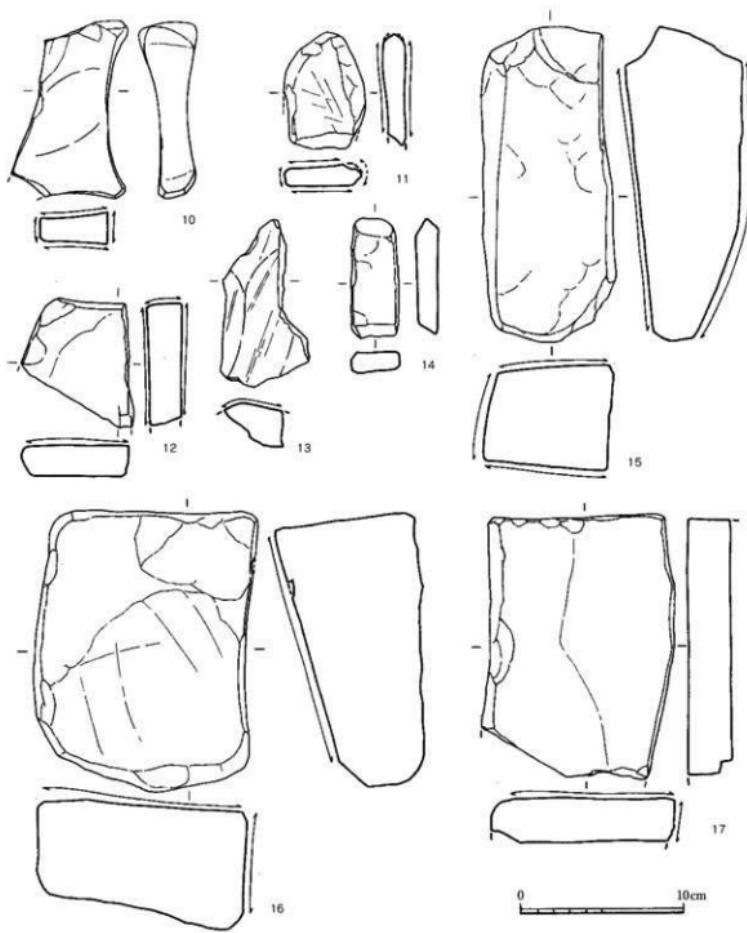
7から9は磨製石斧。いずれも綠泥片岩製である。7は基部を欠損する。刃部は幾分刃こぼれするが、銳さを保っている。南包含層下層から出土。8は基部を欠損する。刃部は銳さを保っている。



第21図 石器実測図1 (1~5は2/3、他は1/2)

中央包含層西側の灰色土から出土。9は刃部を欠損するが、下端の側面に強い稜が観察されることから、刃部は近いものと判断される。南部遺構面の自然流路の肩から出土。

10から17は砥石である。10は肌理の細かい砂岩製の仕上げ砥石。全面が良く使用されており、外形は大きな曲線を描く。南包含層検出面出土。11は粘板岩製の仕上げ砥石。全体的に丸みを帯びる形状。厚さが1cm程度と薄い。南包含層下層から出土。12は砂岩製の砥石。中程度の肌理である。圓面下端の欠損は新しいもので、本来はより大きい。南包含層下層から出土。13は粘板岩製の仕上げ砥石で、大型品の断片であろう。直線的な使用痕を残す。南包含層下層から出土。



第22図 石器実測図2 (1/3)

14は砂岩製の方柱形の石製品。形状的には砥石の可能性があるが、火を受けたように風化しており、表面の観察は行い難い。砥石とすれば粗砥の肌理である。中央包含層灰褐色土から出土。

15は砂岩製の大形砥石。肌理は中砥程度である。使用面には直線的というよりも円弧を描く鱗状の使用痕跡が確認される。南包含層下層から出土。16は砂岩製の大形砥石で粗砥といえる肌理。広い使用面には直線的な使用痕がみられる。その反対面はクレーター状の凹凸が連続しているが、成形の痕跡であろうか。風化により剥離が進む。中央包含層上層から出土。17は砂岩製の砥石で、肌理は中砥程度。使用的痕跡は少ない。節理に沿って割れ、板状を呈する。南包含層下層から出土。

IV おわりに

今回の発掘調査は、谷部に堆積する遺物包含層の調査が中心となった。遺構は、調査区南東側の標高が高い地点で検出された。検出されたのは土坑と溝状遺構であるが、その形状から判断して自然地形・自然流路に近い性格が想定され、また遺物もほとんど出土しなかった。

その標高が高い南東部から北および西に向かって地形は傾斜し、谷部となるが、そこには遺物包含層が形成されていた。遺物包含層は最上層に中世の白磁や土師器が存在する層が部分的に広がっているがごく薄く、上層の黒色土と下層の灰色土の堆積を主とするものである。上層黒色土は古墳時代前期の土師器が主体である。下層灰色土は弥生時代後期の土器を主とするが、大きく広がらない袋状口縁の壺や、平底～凸レンズ状の底部形態から、弥生時代後期の中でも前半から中葉に位置づけられよう。

谷部は灰色粘土と灰色シルト質土が互層に堆積する状況が観察された。当該地点は内野川と井野川が合流する地点に近く、氾濫等の河川作用に由来する堆積が形成されているものと判断される。谷部では先にみた遺物包含層出土土器よりも古い時期に位置づけられる石器類が少數ながら出土している。今回の調査区では、当該時期の遺構や遺物包含層は検出されていない。磨滅が進行している状態からみても、河川の作用により、当該時期の文化財は早い段階に失われているか、もしくは近隣より運ばれてきたものであろう。

これらの形成された遺物包含層は、本遺跡の東側を中心に分布する木川・畑田遺跡に関連するものであろうと考えられる。木川・畑田遺跡は既に農地改良事業により削平され失われていると考えられるが、今回の発掘調査により、その集落の実態、すなわち弥生時代後期から古墳時代にかけてを中心とする集落遺跡であったであろうという想定ができるようになった。

弥生時代後期から古墳時代にかけての時期といえば、宇美町内では国指定史跡光正寺古墳が思い起こされる。光正寺古墳は全長 54m の前方後円墳で、築造時期は 3 世紀中頃から後半とされる。宇美町は魏志倭人伝の記述にある不弥國に比定する説があり、光正寺古墳の存在はその根拠ともされている。今回の発掘調査による成果では、ちょうど光正寺古墳が築かれた時期と重なる文化財が確認された。主体となる集落の実態が不明瞭なのは残念ではあるが、宇美町の弥生時代から古墳時代を考える上で、資料が加わったものであると評価したい。

図 版

図版 1



1. 調査区全景（西から）



2. 調査区全景
(右下が北、空中写真)

図版2



1. 調査区全景（西から）



2. 調査区南半部
(北西から)



3. 桶状遺構 (東から)



1. 溜まり状遺構（西から）



2. 谷部南半（北西から）



3. 谷部遺物出土状況
(西から)

図版 4



第8図 1



第9図 23



第10図 31



第8図 4



第11図 46



第9図 14



第14図 21

中央包含層・南包含層出土土器

図版 5



第 16 図 38



第 16 図 41



第 16 図 42



第 16 図 43



第 17 図 49



第 19 図 7



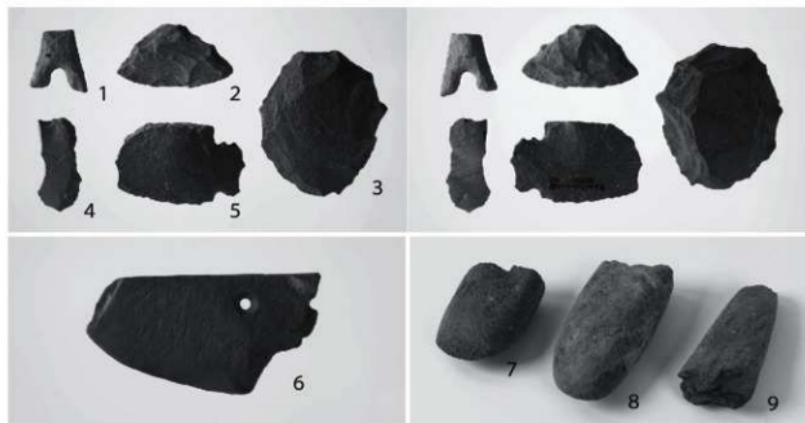
第 20 図 22



第 20 図 26

南包含層・その他層位出土土器

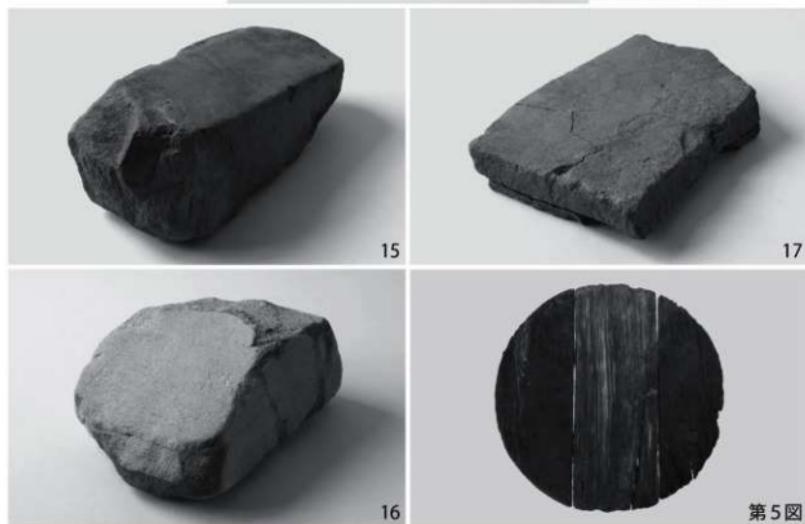
図版6



第21図 1～9



第22図 10～17



第5図

出土石器・木製品

報告書抄録

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
27	11

湯柱遺跡

都市計画道路志免・宇美線街路事業関係文化財調査報告

福岡県文化財調査報告書第253集

平成28年（2016年）3月31日

発行 九州歴史資料館

福岡県小都市三沢5208-3

印刷 石橋印刷株式会社

福岡市博多区東比恵3-21-10